

# Graham Greene 研究

## This Stock of Innocence

— Essay: *Herbert Read* を手がかりに —

宮野祥子

### I

英国の評論家であり詩人である Herbert Read (1893—1968) は、1940年に *Annals of Innocence and Experience* (注<sup>1</sup>) という回想録風な年代記を出版している。それは Part I, Part II, Part III の3部から構成されている。

*The Innocent Eye* と題がつけられている Part I は、すでに、1933年に独立して出版されていたのであるが、ここでは Read が育った Yorkshire の農場での、美しい自然に囲まれた牧歌的な幼年期の思い出が語られている。Part I は13の章から成り、父親の死にまつわる思い出を最後の章として、およそ10才位までの少年 Read が、体験し見つめた、遊び場でもあった農場、そこで働く人々と、子供にとっては楽しい遊びも同然の農作業や酪農の仕事、教会での礼拝、水車小屋、屋根裏部屋の本やヴァイオリンなどのこと、その他多くのことが、鮮やかな色彩と輪郭と香りとを伴って再現されている。

Part II. *The Falcon and the Dove* は、9つの章から成り立っている。Part II では、父親の死後入学させられた孤児学校の孤独な寄宿舎生活の灰色の思い出、15才で卒業して銀行員として働きながら、夜学と公立図書館で勉学を続けたこと、最初医学に、ついで政治に関心を持ち、弁護士になるべく the University of Leeds に入学したことが語られている。その間に詩に興味をもつようになり、大学に入ってからには信仰に疑問を抱き、

結局それまでもっていた信仰を失ってしまったこと、或いは第一次大戦に参加して、将校として戦争を体験したこと、その間、数多くの文学者や思想家の書物を読み吸収して、戦後、文筆家として歩むようになったことを語っている。

Part III は、*The Adamantine Sickle* という題の章で、<宇宙に内在する意志の最高の表現は芸術作品である>(注2)と信ずるに至った Read の基本的な信念や姿勢について述べている。それは、彼が<無垢の眼を捨てて経験という絶望と戦わねばならなかったとき、手中に見いだした武器>(p. 235) であって、堅固無比<adamantine>であると、彼が信じているものである。

1940年から1941年にかけては、London のいわゆる 'blitz' の時代であり、Greene も 1940年には外務省情報局の嘱託となり、1941年末には西アフリカ、英領 Nigeria の Lagos に派遣されている。

第二次大戦の激しい戦況のなかで、誰もが感じていたであろう、国家という集団のなかで、ともすれば見失なわれ、消されてゆく個人の自由と尊厳を思うとき、Greene にとって、この Read の年代記は、第一次大戦に参加して、その体験のなかから歩み始めたひとりの評論家であり詩人である青年の、魂と思想の遍歴と成長の記録として、切実な関心と興味を喚起したにちがいない。

G. Greene は、この *Annals of Innocence and Experience* を読んで、1941年に *Herbert Read* と題するエッセイを書いている(注3)。Greene は1933年に出版された *The Innocent Eye* をすでに読んでおり、改めてこの年代記を読んでみて、Part I の<無垢の眼>で語る Read と、それ以後の Read の間を、いかに遙かな道程がへだてているか、ということに気付き驚ろいている。

Greene と Read とは思想上の立場が全く異っている。Greene はキリスト教信仰をもった存在である。一方 Read は、当時、親交のあった T. S. Eliot に倣って、自分を<anarchist, romanticist and agnostic>(p. 101) と呼んでおり、<不可知論者>と<キリスト教徒>という決定的な違いが両

---

者の間にはあるのである。それにもかかわらず、Greene は、Part I *The Innocent Eye* を高く評価するとともに、評論家としての Read ではなく、作家としての Read の真価を認め、高く評価しているのである。年代記に従うならば、文学的、思想的な遍歴とその立場の披歴である Part II と Part III を斥けて、幼年期の思い出を再現する Part I を良しとする読み方でもある。

このような Greene の態度は、Greene の是認する芸術家の資質を明らかにすると同時に、Greene 自身の文学観の一端を明らかにしていることになるのである。

Greene は Read の数多くの評論及び詩作品のなかから、彼の唯一の小説である *The Green Child* (1935) と、詩 *The End of a War* (1933) および、評論 *Wordsworth* を選び出して、この三作品が <the standard of permanence> (p.142) をなすものであるとしている。絵画や文学における新しい流行、つまり <新知識や新芸術> (p.137) や <フロイトの理論> (p.137) などの <最新の心理学理論> (p.138) を取り入れた評論家 Read は、自らを <断罪する基準を自ら設けた> (p. 142) のである、と述べ、この三作品は *The Innocent Eye* と密接な関連性があることを示唆しているのである。

Greene は、年代記における Part I から Part II, Part III への変化を <sight giving place to thought> (p.138) と云いあらわしている。つまり、*The Innocent Eye* の無垢の眼が外界を映し出した映像である具象の世界が、抽象的な思想の世界にその地位を譲ったのだと判断しているのである。この <無垢の眼> を云いあらわすことばとして、Read は処女の感受性 <a virgin sensibility> (p.19) ということばを用いているのであるが、Greene もまた、このことばを引用し、さらに <this stock of innocence> (p.138) と云いかえて転用している。Greene はそうすることによって、作家の根源的な資質を明らかにし、作家の意識の対称となる外界と作家の関係を云いあらわすことばとして用いているのであるが、そのことはとりもなおさず、Greene の作家としての、或いは、文学に対するひとつの視点ともなっていると云うことができよう。

本論では、このような意味での<innocence>について、GreeneがReadの作品のなかに常に発見できるという、根源的なく栄光と恐怖との間の相剋>(p.139)を手がかりとして、考察してみたいと思う。

## II

Readがこの世のものとは思われない至福の時代<an age of unearthly bliss>(p.67)と呼ぶ、彼の幼年期、つまり<無垢の眼>を持っていた頃は、Readにとっては、それ以後の生活における幸福がすべて繋がっていく時代である(p.67)。この幼年期への限りない憧憬と、幼年期のもつ意味について、Readは次のように述べている。

If only I can recover the sense and uncertainty of those innocent years,...then I am convinced I shall possess a key to much that has happened to me in this other world of conscious living. The echoes of my life which I find in my early childhood are too many to be dismissed as vain coincidences; but it is perhaps my conscious life which is the echo, the only real experiences in life being those lived with a virgin sensibility—so that we only hear a tone once, only see a colour once, see, hear, touch, taste and smell everything but once, the first time. All life is an echo of our first sensations, and we build up our consciousness, our whole mental life, by variations and combinations of these elementary sensations. But it is more complicated than that, for the senses apprehend not only colours and tones and shapes, but also patterns and atmosphere, and our first discovery of these determines the larger patterns and subtler atmospheres of all our subsequent existence. (p.19)

Readが幼年時代に見い出しているのは、それ以後の、彼が自覚して生きている生活の意味を解く鍵である。それは無垢の年月の<感覚と移ろいゆく頼りなさ>を回復するときに手に入るもので、幼年時代の経験をそれ以後の精神生活のひな型として捉えることである。幼いころの感情や感動

を基本的な要素として、変形したり、組み合わせたりして、それ以後の精神生活が築かれ、そのころに感知した色や調子だけでなく、型や雰囲気までが影響を及ぼしていくのだ、というのである。

このような Read の幼年期の位置づけは、幼児のころの体験をそれ以後のすべての体験の祖型と見なすことである。それは一回かぎりではない幼児体験そのものを、回復し、再現することによって、つまり幼児体験そのものを判断の尺度とすることによって、それ以後の生活の意味を見い出そうとする態度である。すなわち、過去における〈a virgin sensibility〉によって捉えられた幼年期の最初の記憶である感情や感動〈sensation〉そのものが、追体験されることが望まれているのである。Read は *The Innocent Eye* の終章でも同様のことを述べている。彼の云う無垢の王国〈realm〉(p.60)は、感受性とその最初の無垢〈its first innocence〉(p.60)を回復するとき、眼や耳という五感が子供の神のように受動の状態で〈in all its child-godly<sup>(注4)</sup>passivity〉(pp. 60-61)、〈sensation〉を甦えらせるとき、再構築されるというのである。ここにも〈至福の時代〉を再現し、追体験するときに、輝く恍惚の地点〈bright points of ecstasy〉(p.60)に出会うという Read の幼年期理解が明らかになっていると云うことができるのである。

Read の語る〈無垢の眼〉の時代、〈a virgin sensibility〉で外界を受けとめた、みずみずしい色彩と鮮明な輪郭で成り立っていた時代は、Read にとって上述のような意味をもつものであると思われるのであるが、Greene はこの〈a virgin sensibility〉ということばを、作家の資質の違いを計る尺度として用いているように思われる。

Greene は、Read の批評精神は最新の心理学の理論を骨折って取り入れようとしているが、創造精神は〈innocence〉へと結びつけられたままである、と述べ (p.138)、上記の Read の〈a virgin sensibility〉についての説明を一部引用しながら、次のように述べている。

But the creative spirit has remained tied to innocence. 'The only real experiences in life,' writes Mr. Read, 'being those lived with a virgin

sensibility—so that we only hear a tone once, only see a colour once, see, hear, touch, taste and smell everything but once, the first time.’ One of the differences between writers is this stock of innocence: the virgin sensibility in some cases lasts into middle age: in Mr. Read’s case, we feel, as in so many of his generation, it died of the shock of war and personal loss. (p.138)

Read が祖型としての、生の幼児体験を語るために用いた <a virgin sensibility> を、Greene が作家の違い <the differences between writers> を知る尺度として転用して用いるとき、この <無垢の感受性> は Greene の云う作家の資質の違い、つまり Greene が作家を評価するための基準となることをあらわしている。だから <創造精神は無垢に結ばれたままである> といひ、<リード氏の場合、それは戦争の衝撃と自らのせいで失なわれ無くなってしまった> という判断も矛盾してはいないのである。Greene は評論家としての Read にはこの感受性を認めず、創造的な仕事にかかわる Read のなかに、Greene の云う <無垢の感受性> という、作家としての基本的な条件が存在しているというのである。

この Greene の <無垢の感受性> にはどのような意味内容が与えられているのであろうか。それは I においてすでに述べたように、Read のすぐれた業績として Greene が選び出した三作品の、特に *The Green Child* と *The End of a War* に、彼が見い出している <恐怖と栄光の相剋> の解釈において明らかにされているように思われる。

Greene は *The Green Child* の主人公 Olivero の夢と冒険の生涯のプロットを動かしていくモメントとして、<恐怖と栄光の感覚> が底流にあると考えているようである。Olivero が the green child である Siloën を救う場面、彼女が小羊の血を飲まされそうになるという、おぞましい恐怖の場面では、Greene は *The Innocent Eye* の第 5 章で語られている、ひとつのエピソードに伴う恐怖を連想している。それは、或る日、幼い Read

が農場の穀倉の片すみにあった油滓を砕く機械<a machine for crushing oil-cake>で指をつぶした時に、私は<fainted with the pain, and the horror of that dim milk-white panic is as ineffaceable as the scar which my flesh still bears> (p.32) と語る、<衝撃で失神しておぼろになってゆくときの乳白色の恐怖>のことである。また、栄光の感覚については、Read 自身幼い頃から、高潔で無私の行為と同一視していた<that sense of glory which from my early youth I have identified with the source of all virtuous and unselfish actions>(p.115) ののであるが、Greene は、これを Read 少年が父親の死後、生れて初めて家を離れて過ごした、孤児学校のある Leeds の町で夢見た、自分の勇ましい未来の姿にその源を求めている。それは *The Falcon and the Dove* の第1章で語られている、白馬に乗った白銀の騎士<a silver knight on a white steed> (p. 76) である自分が、ドン・キホーテのように冒険へと乗り出して行き、<目の眩むような限りない栄光> (p.76) を手に入れる、という幻である。Greene は、*The Green Child* の Olivero の南アメリカでの革命への参加、その後の建国と政治活動、及び英国への帰郷、そして最後に Siloën の故郷である水底の国で迎える死と石化作用<sup>(注5)</sup>—それは自然への永遠の帰結であるが—というようなプロットによって、Read は幼い頃の幻の栄光の実現を描いたのだと解説している。

この<恐怖と栄光の感覚>が擬人化されて、最もよく表現されているのが、*The End of a War* という詩である、と Greene はいう。

この詩には<argument>として、戦場での実話が付けられていて<sup>(注6)</sup>、ドイツ兵に無残にも殺害されたひとりの少女と、イギリス大隊に嘘をついて騙したドイツ兵のことが記されている。

詩は3部から構成されていて、第1部には、*Meditation of a Dying German Officer* と題して、祖国に殉じて、その栄光に満足して死んでゆくドイツ士官の想いが描き出されている。ここには<action>によって証明しようとした祖国<Fatherland>への忠誠と愛<to make our lives / a tribute to its beauty—there is no higher aim>(p.103) が語られている。

*Dialogue Between the Body and the Soul of the Murdered Girl* という第2部は、殺害されたフランスの少女の肉体と魂の対話形式で、一少女の信仰 <But still I swear/Christ was my only King>(p.107) と祖国フランスへの愛 <France was your Motherland: To her you gave your life and limbs>(p.107) が描かれている。

第3部は *Meditation of the Waking English Officer* という題で、鐘の音に見覚めて、平和の朝であることに気付いたイギリス士官の感慨と戦死した敵兵への語りかけが描かれている。戦闘には栄光はなく、復讐には喜びもない <no glory in the strife, no blessed wrath>(p.109), 神は、憎しみは、定かでない、優しい心も <God not real, hate not real, the hearts of men>(p.110)。唯一の回答はこれだ、無限の空間がすべて <the only answer this: the infinite is all>(p.110) と、戦争に打ちのめされたイギリス士官は、こうして私は勝ち抜いてきた <So I have won through>(p.112), 君は死ぬ、権威と名誉のなかで、私は生きる、私の柔和さを嘉されて <You die, in all your power and pride: I live, in my meekness justified>(p.112), と敵兵に語りかけている。

Greene は、この詩の第1部のドイツ士官に栄光の感覚が、第2部のフランスの少女にも国と信仰に身をささげる栄光が表わされていると説明している。そして第3部のイギリス士官には <武勇にも積極的な信仰にも栄光を感じることの出来ない平凡な人間>(p.140) が、戦争という <violence> に巻き込まれ、ようやく生きのびた時の、激しい反動の感情 <revulsion>(p.140) が云い表わされていると述べているが、これは <violence> に従順であった人間の、一種の虚脱感のもたらす憤りを、読みとっているのだと思われるのである。

このように、Greene は、<もし芸術というものがひとつの闘争の解決であるとすれば、リード氏のみごとな作品の源がここにある>(p.140) と、Read の作品の真価を、<恐怖と栄光>の相剋によって認めているのである。



---

この〈恐怖と栄光〉の相剋を理解し、解釈するために、Greeneは〈surrender〉ということばを用いているのであるが、このことばを理解するために、まず、Readの云う栄光について考えてみたいと思う。

*Annals of Innocence and Experience* にも、幾度か栄光の感覚について述べられているが、例えば、英国の17世紀の神秘主義詩人 Thomas Traherne の神秘主義が、感覚的な快楽の是認〈affirmation of sensuous enjoyment〉(p.115)であると説明しながら、次のように云っている。

The senses are God's instruments, and we minister to his power and goodness with these divine engines. We thus acquire a sense of the glory which is immanent in the world, and which we live to exploit, like veins of gold in the dull ore of experience. It is a pantheistic doctrine, since it holds that we only attain true happiness when we actively participate in the processes of nature. (p.115)

この栄光の感覚についての叙述は、Read自身述べているように、汎神論的な考え方に依るものであり、また、意識に与えられる感覚的な経験を超えた実在は認めない(注7)、とする不可知論の考え方もあわせていることを、その背後に認めることができるのである。Readは、神の道具である人間の感覚という〈聖なる装置をつかって神の善と力に仕え、寄与する〉ことによって、世界に内在する栄光の感覚に達することができるとしている。先に述べた Olivero の終結としての死と石化作用に象徴されているように、〈自然の過程に参加する〉とき、〈真実の幸福〉に人間は達することができる、と云うのである。これは物質的宇宙や人間を、神の顯示とみなす汎神論の考え方であり、人間と神の間に断絶を認めない、つまり人格神を認めない人間観によるものである。〈鈍色の鉱石という経験に金の鉱脈を求めて生きるように、生きて栄光を求める〉とは、換言すれば、自然の一部として存在する人間の感覚による生の認識に、内在する聖なる資質を認めることであり、人間の肉体的精神的存在を自然と同一視している

のである。ここには、感覚的な経験を通して、人間の可能性の延長線上に求められるはずの、世界に内在する〈真実の幸福〉という栄光の感覚、本来ならばそうなるはずの可能性を秘めた幻としての、帰属感としての人間の identification が語られているのである。これが Read の語る、人間の在るべき場所としての、或いは、あるべき姿としての栄光に至る道なのである。

それに反して、Greene は、何に至る栄光であるのか、或いは、何による栄光であるのか、ということではなく、栄光に至る人間の姿勢としての〈surrender〉ということばで、Read の云う栄光を云い表わしているのである。それは栄光というものに対する Read と Greene の受けとめ方の違いを表わしているところでもある。つまり人間の可能性の延長線上に栄光を夢見る Read と、人間の可能性によるのではなく、栄光という幻がいつか、〈どこかで得られるであろう、と信ずるキリスト教徒の芸術家〉(p.142) との違いである。Greene は次のような Read のことばを引用して、Read の云う栄光とは〈武勇の栄光や大望〉(p.141) だけを云うのではなく、〈surrender〉であると解釈している。

‘Glory is the radiance in which virtues flourish. The love of glory is the sanction of great deeds; all greatness and magnanimity proceed not from calculation but from an instinctive desire for the quality of glory. Glory is distinguished from fortune, because fortune exacts care; you must connive with your fellows and compromise yourself in a thousand ways to make sure of its fickle favours. Glory is gained directly, if one has the genius to deserve it: glory is sudden.’

In that sense glory is always surrender—the English officer also experienced glory in the completeness of his surrender to the machine: the ‘wavering grace’ too is glory. But just as the meaning of glory extends far beyond great deeds, so the fear of violence extends to the same borders. Surrender of any kind seems a betrayal: the milk-white panic is felt at the idea of any self-revelation. The intellect strives to be impersonal,

---

and the conflict becomes as extensive as life—life as the artist describes it today, ‘empty of grace, of faith, of fervour and magnanimity.’ (p.141)

文中に引用されている Read のことば〈Glory is … sudden〉が何からの引用であるのか末詳であるが(注<sup>8</sup>)、これによれば、栄光とは、何らかの人為的な作為によっては決して得られるものではない。それは、本能的な欲求〈instinctive desire〉によるものであり、栄光に価する天性〈the genius to deserve it〉に与えられるものだ、というのである。先に述べたように、Read の云う栄光は、自然の過程に参加し、感覚を通じて神に仕えるという、人間に内在する聖なる資質によって到達することができると考えられていたのである。そうであるならば、この〈instinctive desire〉や〈the genius to deserve it〉は、人間が本来的にそなえている栄光に至る資質であろう。だから、栄光とは、そのような資質をそなえている人間に直接与えられるのであって、人間の作為は必要としない。ただ、偉大な行為へと促がす美德は、栄光の本質を求める内在的な願いや天性の才に依るものであるということなのである。その願いや天性とは、先の Read の栄光についてのことばを用いるならば、人間の感覚によって得られる経験を媒介として、〈宇宙に内在する意志〉へと向う、仕え寄与する〈minister〉、開拓する〈exploit〉、参加する〈participate〉ということばで、云い表わされていると思われるのである。

このように考えるならば、栄光という幻は、〈どこかで得られるであろうと信ずるキリスト教徒の芸術家〉である Greene が、栄光を〈surrender〉という姿勢で云い表わしているのは当然であり、超越的な人格神を認める Greene と、そうではない Read との違いを如実に語っていると考えられる。

Greene は、*The End of a War* の第3部のイギリス士官を例にして、栄光は〈surrender〉であることを説明している。このイギリス士官は〈機械に完全に身を放棄してさし出したとき〉栄光を体験したのである、というのである。この場合の栄光とは、忍耐強く柔かな人間〈the meek〉(p.

112) がやっと手にした平安の時を意味する、きらめく神の恩寵 <waving grace> (p.112) なのである。それはまた、<私は生きる、柔和さを嘉されて>と語るイギリス士官の identification の象徴でもある。

そうであるならば、この <surrender> とは明らかに、栄光に至る人間の、彼をとり囲む外界に対する姿勢をあらわすことばとして用いられていることになるのである。イギリス士官が身をゆだねてさし出したのは、<機械>ということばで表現されている、戦争という暴力的な、或いは、国家という個人の力をはるかに超えている暴力的な存在である。そしてさらに、この <機械> という、個人を凌駕して存在する暴力というイメージは、先述したように、無垢の時代の Read 少年が、指を砕くことによって体験した <乳白色の恐慌状態> を生ぜしめた <油滓を砕く機械> のイメージへとつながっていくものなのである。

Greene が、続けて、<しかし栄光の意味が偉大な行為を超えて広がるように、暴力への恐怖も同じ境界へと広がっていく>と云っているのも、この <surrender> という行為が、<機械> という暴力的な外界との、最も原初的な関わり方を表わしているからである。つまり、外界を、個人を凌駕して存在する暴力的な、或いは絶対的な存在として捉えることによって成り立つ、個人と外界との関係概念を表わす <surrender> なのである。従って、<どのような surrender であれ裏切りのように思われる。だから乳白色の恐慌状態は、何らかの自己顯示が意図されているときに生ずるのだ>という Greene のことばは、次のように理解できるのである。——あの日、Read 少年が油滓を砕く機械に手を触れることによって、機械と彼との間には、彼に襲いかかった予期しなかった力、自分ではどのようにもできなくて <surrender> するだけであった、機械のもっている <violence> を初めて体験することによって、新しい関係が生じたのである。それは、機械という外在的な現実である外界に対して、自分の無力であること、或いは自分が無力でしかあり得なく傷を負う存在である、という自分と機械との新しい関係の発見であったのである。それはまた、それまでの自己認識への裏切り、自己の内部に <隠しておくのが望ましいことの 顯示や暴

---

露>(O.E.D)がその時なされるのであり、同時に、それは自分にとっての新しい意味をもつ外界、新しい世界が啓示されるときでもある。<恐慌状態>という一種の危機状況のなかで、自己の全存在性が問われるときなのである。

このように考えるならば、この<surrender>は、外界と個人間の関係を生ぜしめる実存的な姿勢を表わしていることばである。外界との初めての出会いによって生ずる、衝撃的な恐怖である自己顯示<self-revelation>と、イギリス士官の姿で明らかにされた、自分の居るべき場所、或いはあるべき姿を発見するという栄光、つまり帰属感としての identification の発見との間の相剋をもたらす、自分の全存在を賭ける<surrender>である、と云えるのではないだろうか。

このような<surrender>の生ぜしめるものは、きわめて私的な、個人に特有な<personal>世界に関わることがらである。だから、先の引用の<surrender>の説明の後に続いている、<知識人達が懸命に非個人的であろうとすると、この相剋は茫漠と広がってゆく>という Greene のことばは、きわめて個人的な世界認識に支えられていなければ、<優雅、信念、熱烈さ、寛大さ>という生命に溢れた文学は生れてこない、ということを語っているのだと思われるのである。それは、個人特有の世界認識という特殊な視点を通して、普遍化された世界であるところの作品が出現することでもある。つまり、いわば、社会の中でひとつの点として存在している個人という視点から、全体を描き出すということであり、視点の周辺性(注9)ということでもある。

このように考えるならば、Greene の作品に登場する、無法者、集団社会からはみ出し者、子供、という疎外された者たち(例えば、*A Gun for Sale* の Raven, *Brighton Rock* の Pinkie, *The Heart of the Matter* の Scobie, *England Made Me* の Farrant 姉弟, *The End of the Party* の Francis と Peter, *The Basement Room* の Philip など)の存在の意図のひとつが明らかになるのである。

## III

Greene が Read の作品のなかに見い出した〈恐怖と栄光の相剋〉は、Greene が高く評価する作家としての Read の真価を証明するものであった。それはまた、Greene が是認する作家の本質をも明らかにすることであって、Greene の云う〈無垢の感受性〉を具えている Read の、その根源的な本質を探ることもあったのである。Greene は、それを、〈surrender〉ということばで、外界との実存的な関わり方を表わす、〈self-revelation〉と〈identification〉との相剋である、と見なしたのである。

従って、Greene が〈this stock of innocence〉〈the virgin sensibility〉を作家の違いを計る尺度として用いるとき、この〈無垢の感受性〉とは、作家と外界とが常に無垢の関係であること、つまり、作家が外界に対して実存在的な原初の関係を保ち得ることを云っているのだと思われる。先入観や偏見や過去の体験に基づく人間観に捉われることなく、自分をとりまく外界の事実に、〈surrender〉することのできる作家こそが、Greene の是認する作家なのである。それは、常にあらゆる事実を最初の無垢の体験として受けとめることによって、絶えず新しく〈identification〉と〈self-revelation〉とを追求する相剋に身を晒している作家のことである。相剋の終りをもたらす栄光は永久に訪れることはないであろう。Greene が云うように (p.142)、作家にとっては、〈fantasies〉、つまり作品という〈escape〉としてしか相剋の解決はあり得ないからである。従って、作家とは、自己と外界との間に新しい関係を発見しつづける存在である、とも云えるのである。

Greene は、彼の作中人物を形象するためにしばしば〈innocence〉ということばを用いているのであるが、本論は、その意味内容を知るための、ひとつの傍証としての試みである。これは、さらに、Henry James について、Greene が用いている〈innocence〉についても、あわせて考察せねば

ならないことである。

\* \* \* \* \*

- 注1 テキストは1946年に再版されたものの1974年版である。  
*Annals of Innocence and Experience*, by Herbert Read, Haskell House Publishers LTD.  
再版の序によれば, Part II は再版にあたって, かなり改訂され, それまで独立して出版されていた *In Retreat* が Part II 第7章として加えられた。Part I 及び Part III は初版のままである。
- 注2 初版の序, *ibid.* p.10
- 注3 *The Lost Childhood and other Essays*, by Graham Greene, The Viking Press, 1966.
- 注4 <童児神><kindgott>の英語訳かどうか未詳。  
カール・ケレーニィ, カール・グスタフ・ユング著, 杉浦忠夫訳「神話学入門」, 晶文社, 1975, p.110.
- 注5 petrification, petrification は, depersonalization (離人化) とともに, 心理学で, 人間がアイデンティティと自律性とを確立し, 内的統一, 実体性, 真実性, 価値をもつものとして, 存在論的な安定を保つことができなくなったとき, アイデンティティが完全に孤立するか完全に他者に没入するかの両極の間を永久に揺れ動くときに表われる状態をいう。つまり自分が人間の自律性を欠いた死物, 石などに変わる, 変えられるという恐怖, 他者の自律性を否定し, <石化>して石にかえ, ものとして取り扱い, 他者を感情のないものとして見なそうとする離人化を云う。Read はこのような否定的人間像を, 逆に肯定的な, 自然との永遠の一体化という理想状況をあらわすために用いている。  
R. D. レイン著, 阪本健二, 志貴春彦, 笠原嘉訳, 「ひき裂かれた自己」第1部第3章存在論的な不安定, みすず書房, 1975参照。
- 注6 *Collected Poems*, by Herbert Read, Faber and Faber, 1966.
- 注7 古在由重, 栗田賢三編, 岩波小辞典「哲学」岩波書店, 1955
- 注8 初版の Part II からの引用か
- 注9 山口昌男著「道徳的世界」(民俗と周辺の現実) 筑摩書房, 1975, 及び, 「知の祝祭」(文化における中心と周縁) 青土社, 1977, 参照。

補注 Read の死の5年前、1963年に出版された自伝*The Contrary Experience* の1973年版には、Greene の personal foreword が新しく加えられている。それには、終生の友となった Read との出会い、Greene が *Night and Day* の part-editor であった頃、Read がその週刊誌に記事を書けるに到ったことなどについて、それにまつわる思い出などが語られているのである。そこには、手術後、最後の何ヶ月かを Greene の別荘に滞在する計画をたてるなど、死に至るまで親しく文通した Read にたいする敬愛、懐かしさ、優しい気持があふれている。それと共に、Greene は30年余の後も、Read の〈偉大な不朽の業績〉として、本稿で扱ったエッセイで列挙しているのと同じ作品をあげ、同様に、〈the search for glory〉という Read の情熱についても述べている。そして、〈But true glory is a private and discreet virtue, and is only fully realised in solitariness〉という Read のことばを引用しながら、第一次大戦後、人々との親しい接触から身を転じて野に向い、*The Innocent Eye* の舞台であった丘やムーアなどに囲まれて、孤独のなかで、ついに〈栄光〉に到ったのであると理解している。Read の最後の手紙、そしてそれが彼が書いた最後の手紙であったのだが、それには〈I had built up the Lourdes' spirit and there was going to be a miraculous cure〉とあり、Greene は〈The reference to Lourdes from this most Christian of unbelievers came as no surprise〉と、Read の晩年の変化を驚ろくことなく受け入れている。それでそれは、〈The impulse which moves him to irrational action I have called the sense of glory〉という、すでに Read が書いていた〈栄光〉の概念の本質的な一面によって理解されるものであるとしている。

本文中の訳文については、前川祐一訳「失われた幼年時代」南雲堂、1974、及び、北條文緒訳「ハーバート・リード自伝」法政大学出版局、1970、を参照いたしました。